

教師はよくなるか

識者が「書けない、話せない先生が増加している」ことを懸念している。教員の資格免許をこらした学生に与える制度がおかしい。つぎに先生の主義思想つまり意識がおかしい。最後に指導者としての人間性が備わっていない。先号で実社会体験を積ませよと言ったがこれだけでいいか。

小原礼子は今更にならぬ

社員研修会社も教育分野なの謝る、忘れる、注意する。ペテラで、時折学校の教員志望者が応募して来る。教員の資格はとったが頼りない人ばかりで採用したことがないが、過去に一人、素直そうな新卒の女性を営業に採用したことがある。名は小原礼子。

小学校の教師になりたかったがアキがなくて、浪人してしまつた。アキができて採用されるまでお宅で働かせていただきたと言ふ。子供っぽくて頼りなくて営業が得意とは思えないが、言うことが殊勝なので採用した。教育研修をして鍛えれば使いたいものになるかもしれないと思つた。

三カ月のビジネス基礎研修を受けさせた。小原は姿勢がよくなり、挨拶をキチンとするようになった。呼ばば「はい」と返事をしてメモを持ってやってくる。朝礼の一分間スピーチもそつなく行った。入社時と比べれば格段の進歩である。ペテランの女性営業部員は娘のような小原をかわいがり、ていねいに仕事を教えた。ところが、聞く態度姿勢はよくなくなったが、小原はペテランをあきらめた。教えたことが身につかない。注意すると「すみません」と言つて改めるが、翌日はまたそれを忘れてくる。また注意する、

経営管理講座 297 染谷和巳

悪いのか。必ず聞き直す。用件を聞いてから課長に話す。お客様はもう一度用件を言い直さなければならぬので少し不愉快になっている。半年たつてもこうである。パソコンでワープロは打てるが遅い。お客様の住所電話を調べさせるとペテランなら三〇秒だが、小原は五分かかる。私は「まだか、遅い！」と怒る。

小学生の先生になるのだから読み書きは得意のはずである。漢字の書き取りテストの点数はまずまづだが、それが理解力、表現力につながっていない。私は「〇〇を調べてくれ」と小原に頼んだ。あまりに要領が悪くイライラしたので二度と頼まなくなった。大人の話がでないので雑談にも参加できない。

上司や先輩に叱られてペソをかき、「幼稚園の子みたい」と笑われた。陰で「あの子、よく辞めないな、鈍感なのね」と言われた。私は内心「早く辞めてくれないかな」と思つた。

教員に社会体験を積ませても

原因は先生の質の低下だが、これには目をつぶる。教員免許のレベルを上げれば先生のなり手がなくなる。思想は文部科学省が日教組に牛耳られていたので触れなれない。人間性の向上となつたら気が遠くなるテーマだ。だから先生を増やして責任を軽くするしかない。教員の免許制度と日教組の弊害は国の政治が取り組む課題である。私たちが学校教育の問題で提案できるのは「教師の人間性の向上」という課題。

上は上を見る。その鋭い眼力と正確さは天賦の本能か。幼稚園児ですら、いい先生とよくない先生を見分け、いい先生に慕い寄りよくない先生から離れる。

下は上のどこを見るか。人間性である。英語をネイティブのように流暢に話す英語教師。生徒はその点で優れているのを認めるが、この教師が日本の歴史や文学について質問されても答えられず、授業を放棄して日教組の活動に参加し、気に入った女生徒を露骨にえこひいきして教室の空気を冷たさせ、利己的でずるくて心が冷たいなら、生徒は進んで教えてもらいたくないと思わない。教師のみならず、経営者も中間管理者も、上に立つ人は「優れた人間性」が求められる。ではどうすれば人間性を高められるか。

人間性は実社会で苦勞し努力し問題を解決し戦いに勝つたり負けたりすることによって培われる。だが待てよ。作つたり売つたりの実業体験が本当に人間性を高めるか。高まる人もいるがたいして高まらない人が大半ではないか。

現在、校長や教頭の候補者を半年一年、信用ある会社に出向させて実社会体験を積ませる制度を作つて実行している県や市がある。会社は派遣された先生を社員としてではなく研修生として、また見学者として見る。お客様扱いはしないまでも、上司は部下に接するように接することができない。注意するにも遠慮が出る。こんな特別なぬるま湯につかっている誰であろうと一年いても変わらない。「勉強になりました」と頭を下げて帰って行くが、先生は心も頭も顔つきも来た時とあまり変わっていない(もちろんこの一年間の経験が全くムダだとは言わない)。

環境と経験が人を育てる。だが壁を乗り越えようと挑戦したり、問題を解決するために戦つたりしなければ、つまり汗も涙もない、心の痛みや激しい喜怒哀楽をともしなれない経験であれば、人は変わらない、成長しない。

何事にも言えるが本人の成長意欲(向上心)、立派な指導者になりたいという気持ちや前提である。この強い心があれば人は自力で成長することができる。

自己啓発を怠る指導者は失格

小原礼子は先生になつてから苦勞したと思う。生徒が言うことを聞かない。生徒になめられる。精神を病んだかもしれない。

小原に欠けていたもの、その大半は日頃の努力によつて身につけることができた。小原はそうした能力が先生に必要だと思わなかった。教職課程は教師の人間性を問題外としており一行も教えない。教育実習を受けて免許を取得する

れば教壇に立つて先生が勤まると思つていた。人間として未熟でも生徒の指導には支障ないと思つていた。現場に出て甘さが解つた。子供の頃から家庭で、学校であるいは友だちとの遊びを通じて「自己啓発」を行つてくればよかった。そうすれば尊敬される人間性を備えた先生になれたかもしれない。自己啓発を怠つたために人間未熟のまま社会に出てしまった。